

14. 越中久保遺跡

所在地 長坂町中丸字鳥久保

調査原因 鳥久保地区圃場整備にともなう事前調査

調査期間 1999年4月22日～2000年3月31日

調査面積 約4,400m²

調査主体 長坂町教育委員会

担当者 小宮山 隆



越中久保遺跡は、八ヶ岳南麓の大深沢川と宮川に挟まれた台地の東縁辺に立地する。調査地の海拔はおよそ787mである。遺跡の中央は凹地になっており、宮川へ注ぐ支谷がかつては存在した。現在、この支谷は遺跡の西側でせき止められ、農業用水池（越中久保溜池）が1981年に造られている。この凹地の部分は「ドジョウ田」と地元で呼ばれる湿田で、現在までに大半は耕作が放棄され湿原化している。凹地である谷地形（低湿地）を挟むように、調査区の南北端それぞれに微高地があり、縄文時代の住居跡など主な遺構はこの微高地に集中する。遺物の分布も微高地を主体に調査区全面にわたるが、低湿地部分では旧支谷周辺からの流れ込みと推測できる非常に磨滅した遺物が多く見られた。宮川の現河床との比高は低湿地部でおよそ2m、微高地で2～5mである。

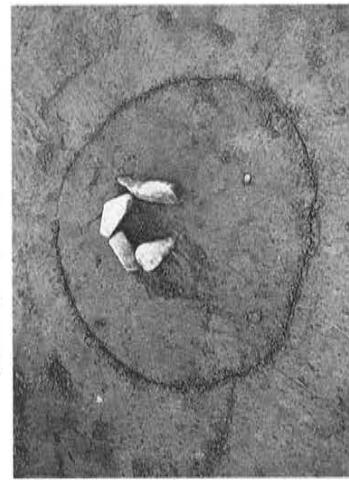
現段階で確認できた遺構は、竪穴住居跡4軒（縄文時代中期末葉）、方形柱穴跡3基以上（縄文時代中・後期）、土坑38基（縄文時代中・後期）、ピット200基以上（縄文時代？）、溝2ヶ所（時代不明）などである。このうち、調査区北端の微高地から台地への斜面にある2号住居跡からは、大量の炭化材が検出された。現在、同定作業を行っているが、おそらくクリと思われる。板状に加工したもの、チップ材状のものなどがある。また、板状の材にはホゾ穴状の部分もあるが人為的な加工なのは判然としない。柱などの住居構造材は無いようである。これらの炭化材は、石窯の周囲に密集していて、その外縁には認められない。また、低湿地部で確認された土坑5基（14・15・17・24・25号）は、いずれも確認面付近で人頭大の礫と土器が配される。土器は曾利式終末・加曾利E4式・称名寺式・堀之内式があり、これらの土坑にはある程度の時間差が予測されるものの、低湿地という立地、および礫の存在という共通点があるようだ。韮崎市の三宮地遺跡では、河床面に近い低地で縄文時代晚期前葉の土坑群が検出されており（韮崎市教委ほか1998『三宮地遺跡』）、本遺跡の資料も含めて低（湿）地での遺構の在り方が注目される。土坑覆土の理化学分析の結果を待ち、改めて検討と報告を行いたい。調査期間中には、町内の小学校と甲府市内の中・高等学校の児童・生徒が校外学習の一環として、住居跡直上の包含層の発掘調査を体験学習した。トータルステーションを用いての全点取り上げという困難な条件下での体験発掘であったが、子供たちが熱心に取り組んでいたのが印象に残っている。



長坂町立秋田小学校6年生の校外学習



2号住跡居 火の周囲に炭化材



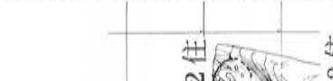
2号住跡居



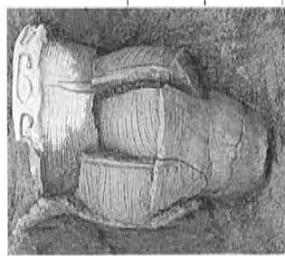
23号土壤 上部に石組み



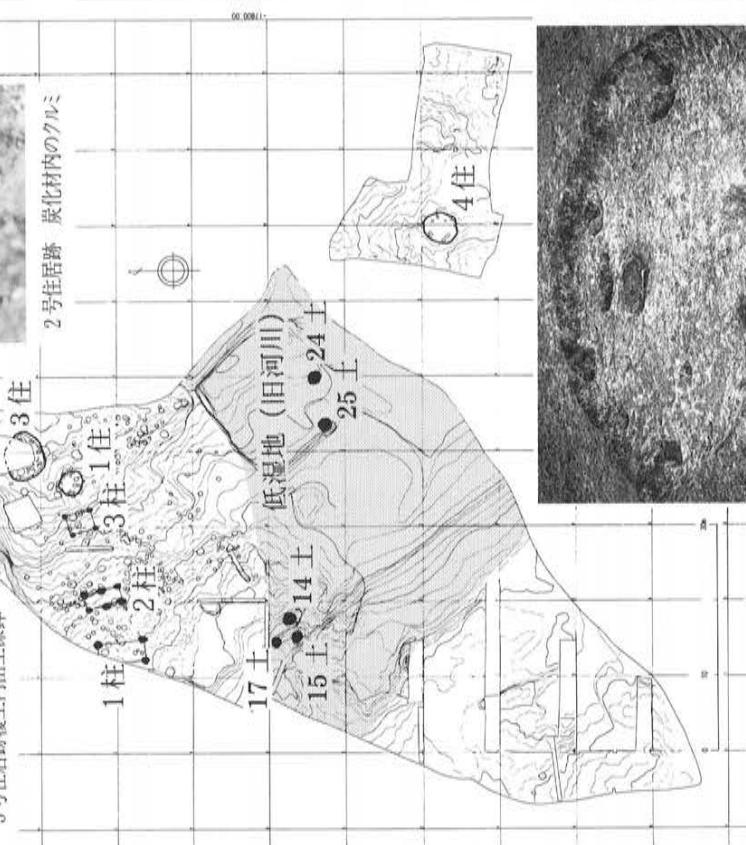
2号住跡居 蔑化材内のケルミ



2号住跡居 23号土壤
3号住跡



3号住跡居土内出土深林



1号住跡

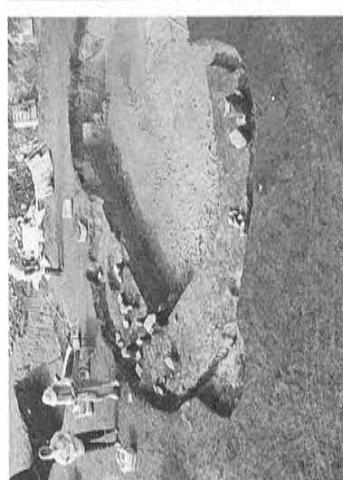


15号土壤 蔑・遺物出土状況

24号土壤壁認面

越中久保遺跡概要図 (住：住居跡、柱：柱穴列、土：土壤)

4号住跡



3号住跡